

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ——
漢文の句式編

【第11回】反語の形（反語の語気詞・反語の副詞）

反語ってのはどんな表現だい？ 疑問の形を学んでいた時にも、何度か「反語」ってことは出てきただろ？

自分が本当はこう思ってるって判断があるとするだろ？ それを強めるために、あえてわざと逆の内容を疑問の形で述べる、それを反語っていうんだね。

たとえば、「おれは人の物を盗みはしない」って思ってるとするだろ？ それをそのまま表現すれば否定文だよ。

ところが、そんなことをするはずがないと強調するために、「おれが人のものを盗んだりするか！」とか、「おれがどうして人のものを盗むだろう？」とか、「盗まない」の逆の「盗む」を疑問形「盗むか？」と問いかける、これが反語表現だよ。

こういうふうに表示することで、単に「おれは盗まない」という以上に、「決して盗まない」という強い意志がこもるんだ。

反語には今述べたような強調のためのものと、それとは別に確認を目的に、やっぱり逆の内容を疑問の形で述べる形式も含まれる。

たとえば、「あなた、佐藤さんじゃないですか？」ってのは、疑問文のようだけど、実のところ「もしかしたら佐藤さんかな？」という不確かな思いがあつて、それを確かめるために問いかけてるだろ？

だから、疑問文とも言えるし、反語文とも言える。

あるいは、推測を表す文とも言えるよな。

このようにいくつか捉えようはあるわけだけど、その表現形式は大切だから、しっかりこの講義で理解してくれよな。

1. 反語の語気詞を用いる形

疑問の語気を表す語気詞って色々あつたよな？ たとえば「乎」とか「耶」「歟」…とか。

これらはみんな反語の語気も表すんだ。

だから、たとえば「無人乎」が疑問文なら、「無^キ人乎^か」と読んで「人がいないか？」と問いかけることになる。

でも、同じ「人がいないか？」でも「いや、いるだろう！」と言いたい場合があるだろ？ それは反語だが、疑問ではなく反語だとわかるように、「無^カ人乎^や」と読みかえるんだ。

「人はいる」ということを強めるために、わざと逆の疑問形で問いかけることになるんだ。

これはさつき説明した通りだね。

ところが、理屈の上ではそうなるんだが、意外なことに「〜乎」(〜せんや)とか「〜乎」(〜ならんや)と、語気詞だけで反語を表す例はかなり少ないんだ。

え？じゃあ、なんで「反語の語気詞を用いる形」なんてタイトルなんだって？

うん、まあ疑問代詞や反語の副詞と併用されるのはごく普通のことだし、疑問代詞や反語の副詞が伴わなくても、助動詞や否定を表す語と共に用いられることは結構あるんだよ。

①可能の助動詞と共に用いる形

反語の語気詞単独ではあまり見られない反語文も、可能の助動詞「能」「可」「得」と共に用いられる表現は頻繁に見られる。

「能」「可」「得」は、同じ可能の助動詞とはいっても、できる理由がそれぞれ異なるんだが、早い話が日本でも「〜できるか！〜できるわけないだろ！」って表現は日本でもよく使うじゃないか。

能^レ免^ル於^ニ患^ヒ乎。

▼能^よく患^{わざは}ひを免^{まぬ}か^かれんや。

▽災いを逃れることができるだろうか。(いや、逃れることはできない。)

これは、反語の語気詞が可能の助動詞「能」と共に用いられる形。

とても「災いから逃れられない」と思っていることがあるとするだろ？

前にも言ったように、それをそのまま言えば否定だよ、漢文では「不^ハ能^ル免^ル於^ニ患^ヒ」と表現する。それを、強めて表現するために、逆の疑問形で問いかけたのがこの例さ。

つまりは肯定の疑問形になるわけ。

「能」は、「不能」の時だけ「あたハ(ず)」と読むけど、それ以外では「よク」と読むだろ？

だから「能く患ひを免かれんや」と読んでるんだ、この約束ごとも確認しとけよ。

で、この文は「災いを逃れることができるだろうか」と訳した上で、その後に「いや、災いを逃れることはできない」と付け加えるのが、いわゆる学校漢文の反語の訳し方のルールになっている。

つまり、**反語は「どうして〜か。(うや、〜)」と訳すのがきまり**ってこと。

現実にはさ、「いや、〜」なんて言わないだろ？たとえば、「俺が人のものを盗んだりするか？」と言った後に「いや、盗まない」なんてまず言わないよな？

だから、ナンセンスといえばナンセンスなんだが、でも、反語文の言いたいことが何なのかを確認する上では大いに意味がある。

だから、「いや、〜」というのにも後につけとけよ。気になるなら、()つけときゃいい。

それにな、実力テストや入試問題で反語文の意味が問われた時、その答えが選択肢なら、まず「災いを逃れることができるだろうか」は、その中にはないと思う。

そうではなくって、「災いを逃れることはできない」という、要するに言いたいことを選択肢で選ばせる問題が圧倒的に多い。

その意味でも、「いや、ゝ」は書き添える癖付けしとくのは意味があるね。

以^テ臣^ヲ弑^{スル}君^ヲ、可^ク謂^フ仁^ト乎^ヤ。

▼臣^{しん}を以^{もつ}て君^{きみ}を弑^{しい}するは、仁^{じん}と謂^いふべけんや。

▽臣下でありながら主君を殺すのは、仁といえようか。（いや、仁とはいえない。）

これは反語の語気詞が可能な助動詞「可」と共に用いられる形だね。

「弑^{しい}ス」は、家臣が主君を殺すという意味の動詞だ。史伝物によく出てくるから注意！

「可」はもともと形容詞で「よろしい」っていう意味の語だから、「ゝしてよい」という意味や、してよいから「ゝできる」って意味を表すんだっただろ？

だから、「可^ケゝ乎^ス」は「ゝしてよいだろうか（いや、ゝしてはいけない）」「あるいは「ゝできるだろうか（いや、ゝできない）」という意味を表すことになる。

で、「べけ」ってなんだい？

違う言い方をすると、「可^ケゝ乎^ス」の形は「ゝすべからんや」とは普通読まない。

「べけ」ってのは、奈良時代の「べし」の未然形なんだ。

つまり、そんな大昔からこの形は「ゝすべけんや」と読んでいて、それが今に続いてるってことさ。

ところで、この言葉を口にした人のこと知ってるかい？

時は殷王朝末期も末期の話、殷の最後の王様紂^{ちゆう}王のことは前にも話したろ？

夏の桀^け王と並んで暴虐な王の代名詞だね。

頭脳明晰なくせに、悪い方向というか、道理を破壊する方向にしかその才能を向けられなかった王様で、妲己^{だつき}という、これまたひどい悪女を溺愛して、贅沢三昧したり、諫言する家臣を殺したり、世の不満をおさえつけようと、炮烙^{ほうろく}の刑という残酷な刑罰を行ったりした暴君さ。

だから、完全に世の信頼を失っちゃって、まさに世紀末の状況だったんだ。

この時だね、周の国の武王が武力で殷を倒そうとしたのは。これを殷周革命という。

ところが、これから殷を倒しに行こうとしたその時に、目の前に現れ出たのが、伯夷と叔斉という2人の賢人だったんだ。

この伯夷と叔斉ってのは、孤竹という国の王子だったんだが、おやじの王様が弟の叔斉を跡継ぎにしたいと考えていたんで、その親父の死後、自分がいたんじゃ叔斉が王になれないと、伯夷は国を出る。

お兄さんを差し置いて弟の自分が王になるなんてあり得ん！と、叔斉もまた国を出る。

2人して跡継ぎを放棄して国を出たら、孤竹国が大変なことになるんじゃないかって実は思ったり、思わなかったり：

しゃあないから、孤竹国では、真ん中の次男を王にしたわけ。

さて、この伯夷と叔斉、周の国では文王つて王様が善政を行っていて、老人が大切にされてると聞いて、そりゃきつといい国だと周まで出かけていったんだ。

ところが、着いてみるとすでに文王は亡くなっていて、その子の武王が殷を攻めようとしている所に出くわしちゃう。

そこでさ、2人は武王の馬の手綱をひかえて言うんだ、「父が亡くなったのに葬りもせず、戦争しようとする、孝といえますか！」

そして、その次に言ったのがさっきの例、「家臣でありながら主君を殺す、仁といえますか！」だ。この「仁」というのは、いわゆる「忠」に近いものと考えていい。

武王の側近たちは、すぐさま2人を斬り殺そうとする。

でも、武王の賢臣太公望が止めたのさ、「この者たちは義人である」つてな。

義人つてのは、文字通り義の人、自分が正しいと思ったことは1人でもする、正しくないと思ったことは1人でもしないという、強い意志をもった人物のことだよ。

結局、武王が殷王朝を倒しちゃって、世の中は周王朝のもとに新しい政治が行われるようになった。

でも、伯夷と叔斉はそのような不義の国を仰ぐことを恥じて、正しい人の道に照らして周の食を口にすることを拒否し、首陽山に隠れ住んで、薇をとってそれを食べ、餓死して死んじゃったとか。

ま、そういうお話さ。

薇は昔、ワラビと言われてたけど、どうやらカラスノエンドウのことらしい。

ところで、君らは「カラスノエンドウ」を「カラスのエンドウ」と思ってるだろ？ 違うんだぜ、「カラス野エンドウ」だよ。

たぶん、実が熟すと真っ黒になるから、そう名付けられたんだろ…

微^{カリスバ}子、吾^レ得^レ自^ラ脱^{スル}耶^ヤ。

▼子^し微^なかりせば、吾^{われ}自^{みづか}ら脱^{だつ}するを得^えんや。

▽あなたがいなかったら、私は自分で（無実の者を罰しようとした責任から）脱することができたんだろうか。（いや、脱することはできなかった。）

これは反語の語気詞が可能の助動詞「得」と共に用いられる形。

「得」は、客観的な状況が与えられて可能である、つまり機会があるから可能であることを表すんだったね。

だから、この例では「子（あなた）」の適切なアドバイスがあって、冤罪を作り出すことから脱することができたわけだ。

ここまで述べた「能」「可」「得」という可能の助動詞と反語の語気詞との組み合わせ、もちろん否定副詞「不」などが用いられて、次の形をとることもある。

・不^{ラン}能^{あたハ}レ^{スル}乎^ス。 〴〵することができないだろうか。(いや、〴〵することができぬ。)
・不^{ラン}可^{カラ}レ^ス乎^ス。 〴〵することができないだろうか。(いや、〴〵することができぬ。)
・不^{ラン}得^{スルヲ}レ^ス乎^ス。 〴〵することができないだろうか。(いや、〴〵することができぬ。)

◎ポイント!…疑問の語気詞「乎」「耶」「歟」「邪」「与」などは、反語の語気も表す。単独で用いられるのはまれで、可能の助動詞「能」「可」「得」とあわせ用いられることが多い。

能^ク A 乎^{セン}。

▼能^よく A せんや。

▽A することができようか。(いや、A することはできない。)

可^{ケン} A 乎^ス。

▼A すべきんや。

▽A ことができるだろうか。(いや、A することはできない。)

・A してよいだろうか。(いや、A してはいけない。)

・「A すべからんや」とは読まない。

得^ン A 乎^{スルヲ}。

▼A するを得んや。

▽A することができるだろうか。(いや、A することはできない。)

②否定副詞と共に用いる形

これは疑問の形のところで説明した。以上。

え? 説明してくれないのかって。二度もおんなじこと言わせんなよ。

若^ハ非^ス 吾^ガ 故^ニ 人^ト 乎^ヤ。

▼若^{なんぢ}は吾^わが故人^{こじん}に非^{あら}ずや。

▽あなたは私の旧友ではないか。

面倒くさいから、同じ例だぜ。

もともと全く知らない人に対して、「あなたは私の古い友人ではないですか？」なんて聞かないだろう？
そうじゃないかなあ…という予測があつて、それを確認するために、わざと反対の意味の疑問の形で問いかけてるわけさ。

だから、これは強調のための反語じゃない、確認の反語ともいうべき用法だよ。

あるいは、推定の形っていいもいかな。

第7回「疑問の語気詞」の回をよく復習しといてくれよ。

2. 反語の語気副詞を用いる形

疑問の形のところで紹介した「何」や「安」などの疑問の副詞は、反語でも用いられる。

たとえば日本語でも、「どうして勉強しないの？」と言ったとき、純粹にそれがなぜなのか知りたい場合は疑問だけど、「勉強しなあかんやん！」と思って言ったのなら反語だよな。

それと同じで、「何」や「安」を用いた反語文も普通にあるんだ。

これを、すべての語気副詞について、一々説明し始めたら、またすごい時間がかかるから、詳しくは疑問の回を読み返して復習してもらうことにするが、実はこれらはもともと疑問代詞だよ。

「何」は「なに」、「安」は主に「どこ」という意味の疑問代詞だけど、たとえば「なにを心配しようか！(いや、何も心配しない)」なら、「なにを心配しようか！」と「どうして心配しようか！」は、要するに同じことを言ってるだろう？

また、「どこに疑いを持とうか！いや、どこにも疑いをもたない」という場合なら、「どうして疑おうか！」と、やっぱり結局は同じことになる。

だから、反語の語気副詞といっても、もともとは疑問代詞だって言うんだよ。

ただ、「何を心配するのか？」という疑問文は、その「何」の中身を問いたいんだけど、反語文の場合、そうではなくて、「何」が何であるかを問いたいというよりも、「心配などしない」を主張する方に重きが置かれてる。

つまり、**反語の語気を表すのが「何」や「安」のメインの働き**と考えて、これらを反語の語気副詞としてるんだ。

そのことは、代表的な用法をいくつか紹介していく中で説明していくことにして、まずはどうやって反語の真意を見極めるかという技を伝授しておこう。

水制火、王何疑乎。

▼水の火を制する、王何ぞ疑はんや。

▽水が火を制することは、王様、どうしてお疑いになるでしょうか。（いや、疑わないでしょう。）

この「何」は、「どうして」という意味を表す疑問の語気副詞だ。

それが文末の語気詞「乎」とともにあわせ用いられて、「どうして〜か」という意味を表してる。

水が火を制御する力をもってることは常識だろう？ だから、「どうして疑うのですか？」という理由を問う疑問じゃなくて、言いたいことは「疑わないはずだ」の方にある。

この文も、もともとは「王疑何乎」だったのが、「何」を述語の前に出して、「何疑乎」（何を疑うのか）から、さらに「何疑乎」（どうして疑うだろうか）に転じていったんじゃないかな。

だから、さっき言ったように、反語の語気副詞といっても、もともとは疑問代詞だったんだろうって言うんだよ。

さて、反語文の場合は、疑問じゃなくて反語だよとわかるように、「〜んや」という読み方をすることが多い。

疑問文だったら、「何ぞ疑ふや」と読む。

実は見かけ上はどちらも「何疑乎」で、疑問なのか反語なのかは、文脈での判断が必要だ。

え？ 難しいって？ でも、日本語で「どうしてお疑いになりますか？」と言ったところで、それが疑問なのか反語なのかは、やっぱりその場の状況での判断になるだろうが。

読み方も区別の手がかりになるとはいえ、結局のところ読解力だよ、読解力！

ところで、反語文って、よくテストや入試で口語訳が求められるよね。

記述問題なら、そのまま訳して、後に（いや、〜）をつけときゃいい。

でも、選択式の問題なら、その正解の選択肢は、まず「どうしてお疑いになるでしょうか」じゃない。

主張したいことの中身、「お疑いにならないでしょう」とか「お疑いになるはずはありません」が答えだ。それを見事に導き出す技があるんだよ。

①まず、疑問の語気副詞を「不」に書き換える。

②次に、文末に疑問の語気詞が置かれていたら消す。ない場合はそのまま。

③それを何とか読もうとする。

この3つの手順でOKだ。

何	疑	乎。	▼何ぞ疑はんや。	▽どうして疑うだろうか。
←	←			
不	疑	（ ）。	▼疑はず。	▽疑わない。

「不疑」を何とかがんばって読む、こいつは簡単に「疑はず」だろう？

これって、反語の訳の（いや、〜）の内容そのものじゃないか。

こんな簡単な反語文なら、そんな面倒なことしなくてもわかるかもしれないが、ちょっと長かったり、複雑だったりしたときには、この技はかなり有効だぜ、覚えとくといひ。

「どうして〜か」という意味を表す語には「何」以外に、「奚」「曷」「胡」がある。これは、「何」と漢字の古音が近いからだそうだよ。

また、「安」「焉」「烏」「惡」も、同系統の音を借りて、みな「どうして〜か」という意味を表す。

人君胡可不務愛士乎。

▼人君胡ぞ士を愛するに務めざるべけんや。

▽君主はどうして人物を愛することに務めなくてよいだろうか。（いや、人物を愛することに務めなければならぬ。）

反語の語氣副詞「胡」と語氣詞「乎」をあわせ用いた形だね。

この「胡」も、もとは「どんな理由（で）」「どんな点（で）」という疑問代詞だったのが、ここでは理由を問うより反語を示すのに重きが置かれた語氣副詞だね。

この文なんかになるとかなり複雑になるから、意味を取り違えちゃったりするんだが、例の裏技で言い換えると、「人君不^カ可^ル不^ル務^メ愛^{スルニ}士^ヲ」となつて、「君主は人物を愛することに務めなければならない」という主張の中身が明確になるだろ、ほら、簡単さ。

え？ それでも難しいって？ 「不^カ可^ル不^ル A^セ」の形は否定のところをやったじゃないか！ちゃんと復習しとけよ！

で、この例文にまつわる話なんだが…え、また脱線ですか？って？

いいじゃないか！文法ばかりやって、なにが楽しいんだ！

春秋時代に、趙宣孟^{ちゆうせんもう}という人がいたんだ。

彼が旅の途中、桑の木の下に、餓死寸前でぶっ倒れてる人を見つけたんだよ。

そこで、干し肉を口に含ませてやって、何とか目をあけるところまで回復させたんだ。

なんでこんなことになったんだと聞くと、晋の都で宮仕えをしてたけど、郷里に帰る途中に食糧がつきちやった。

物乞いをするのを恥じ、かといって盗賊になるわけにもいかず、飢えて倒れてしまったんだとか。

趙宣孟はこの男にさらに干し肉を与えると、食べようとしなひ。

どうしたんだ？と聞くと、こんなに美味しいものは老いた母に食べさせたいからといひ。

趙宣孟、「そのまま食べるがよい、お前の母にはまた別に干し肉を用意するからな」と言つて、男に肉と

銭を与えて、去って行ったんだ。かつこいいだろが：

さて、2年ほど経って、晋の霊公が趙宣孟を殺そうと企んで、彼を呼び寄せ、部屋の隅に兵士を潜ませて、何食わぬ顔で酒をふるまったんだ。

しかし、趙宣孟はさすがなもので、伏兵のあるのを察知して、宴席半ばに立ち去る。

霊公はこらあかん！と、潜ませていた兵士に彼を追わせたんだが、1人の兵士の足が速く、趙宣孟に追いついたんだよ。一大事やんけ！

ところが、その兵士、「わが君、早くお逃げください！ここは私が追っ手を食い止めます！」なんて言う。驚いた趙宣孟が名を尋ねると、兵士は言ったんだ、「名乗るほどの者ではありません。あの桑の木の陰で飢えて倒れていた者です」

兵士は引き返して追っ手と戦い、討ち死に。でも、そのおかげで、趙宣孟は生き延びることができたんだよ。

たった1人に情けをかけただけで、そのおかげで命が救われる、まして多くの人に恵みを施せば、どれだけの多くのものがかえってくるだろう。

だから言うんだよ、「人君胡ぞ士を愛するに務めざるべけんや」ってな。

安知江海之深乎。

▼安くんぞ江海の深さを知らんや。

▽どうして大河や海の深さを知るだろうか。（いや、知るはずがない。）

この「安」も、「どこ（に）」という疑問代詞だったのが、反語の語気副詞として用いられてるもの。つまり、「どこに大河や海の深さを知るだろうか」が「どうして大河や海の深さを知るだろうか」に転じたってわけ。

理由を問うことに重きが置かれてるんじゃないくて、主張したい中身の方に重きが置かれた表現なんだ。

「安」が用いられてるけど、さっきの裏技を使えば、「不知江海之深」（大河や海の深さを知らない）となって、主張したい中身がわかるだろ？

理由を問うことに重きが置かれてるんじゃないくて、主張したい中身の方に重きが置かれた表現なんだ。

割鶏焉用牛刀。

▼鶏を割くに焉くんぞ牛刀を用ゐん。

▽鶏をさくのにどうして牛切り包丁を用いようか。（いや、用いる必要はない。）

ちっちゃな鶏を料理するのに、牛用の包丁はいらんやろってことで、「小さな物事を処理するのに有能な人や大げさな方法はいらない」という意味で使われてる言葉だね。

弟子の子游が武城という小さな町を治めていた時、孔子がそこを訪れると、弦歌の音が聞こえてくる。へ？ 弦歌の声って何だ？だって、音楽と歌声だよ。

それを聞いた孔子が笑って子游に言った言葉が、これだよ。

音楽はすなわち礼楽、情操教育として有効で、孔子が重視したもんだけど、こんなちっちゃな町を治めるのにそこまでするか？とからかったわけさ。

もしかしたら、子游の才能をもってしたら、こんな小さな町を治めさせとくのはもったいないんだがな…という思いももってたかもしれん。

でも、子游は真面目に受け取って、「私は先生から、こう教われました。君子が道を学べば人を愛するようになり、小人も道を学べば使いやすい従順な人になると」、そう言われて孔子は子游の言葉が正しいとして、「さっきのは冗談、冗談」と言った、そういうエピソードのあることわざだよ。

さて、ここで用いられている「焉」も「安」と同じで、「どこ(に)」という疑問代詞の働きから転じて、反語の語気副詞として「どうして(か)」という意味を表すんだ。

「どこに牛切り包丁を使うだろうか」がもとともだったこと。

でも、その必要はないの方に重きが置かれて、別に場所を問いたいわけじゃないんだ。

もちろん反語の言わんとする真意、つまり主張したいことも要確認。

そう、「焉」を「不」に置き換えて、「割鶏不用牛刀」にすれば、ほら、「鶏をさくのに牛刀を用いない」になるだろう？

◎ポイント…「何」「胡」「安」「焉」などは、反語の語気を表す語気副詞。反語の語気副詞「乎」

などと併用されることが多い。

何_ハ A_{セン} (乎)。

▼何ぞ A_{ナン} せん (や)。

▽どうして A しようか。(いや、A しない。)

・「奚」「曷」「胡」も同じ読み、意味で用いられる。

安_{アン} A_{セン} (乎)。

▼安くんぞ A_{イッ} せん (や)。

▽どうして A しようか。(いや、A しない。)

・「焉」「焉」「焉」「惡」も同じ読み、意味で用いられる。

ちなみに、「焉」「焉」「惡」などは、入試問題を見ると、時々「なんゾ」と読まれてることもあるね。

読み方は違っても、要するに「どうして〜(か)」という意味を表すんで、あんまり神経質になる必要はないよ。

また、「寧」はもともと「安らかである」という意味を表す語なんだが、どういういきさつでそうなったのかよくわからないんだが、これが「なんゾ」と読まれることもある。

さて、反語を表す副詞の最後は「豈」だ。

吾昔在布衣、豈望富貴。

▼吾昔布衣に在るとき、豈に富貴を望まんや。

▽私は昔庶民であつた時、どうして富貴を望んだであろうか。(いや、まさか望みはしなかった。)

疑問の形の講義の時にさ、この「豈」は紹介したろ？ 覚えてるかい？

そうそう、「どうであろう？」と、相手や自分に一度疑いをもつてみる副詞だったね。

学校漢文では「何」と同じみたいな扱いで、「どうして」って訳してるんだけどな、ほんととはちょっと違うんだ。

「豈望富貴」は、「どうであろう？ 富貴を望んだか？」が本来の意味で、それを「どうして富貴を望んだか？」と意識してるんだよ。

疑いをもつてみるというのは、相手の心や自分の心に対して推測疑問をかけるわけだ。反語の場合なら、どうだった？ 富貴を望んではいなかったんじゃない？ って感じかな。

この「豈」が用いられる反語文や疑問文は句末に「哉」という語気詞が置かれることが多いのも知つてほしいな。

右の文なら、「豈望富貴哉」となって、「哉」自体を「や」って読むんだ。

国無主、其能久乎。

▼国に主無し、其れ能く久しからんや。

▽国に主がない、どうして長く存続できるだろうか。(いや、長く存続することはできない。)

この「其」が、「豈」と同じだという説もある。

というのはさ、「其」が「豈」と漢字の古音が通じるからなんだ。

でも、それはあくまで一つの説で、ためぐち先生は「其」がこれから述べようとする自分の考えを「それだ」と示す働きなんじゃないかなとも思う。

どういうことって？ うん、右の例なら「国に主がないって、それだ、長く存続できるか？」って「長

く存続できない」という自分の考えを「それだ」と先に示しているんじゃないかなって思うんだ。
でも、「其」が「此」より不確実なものを指す指示代詞であったところから、不確実な判断を表す語気副
詞になったとも言われて、まあ色々説はあるわけだ。

学校漢文では、「どうして」と訳したり、あるいは「其」はもう訳さなかったりなんだけどな。

◎ポイント……「豈」は「どうであろう?」と一度疑いをもつけてみる副詞。意識して「どうして」と
訳す。反語の語気詞「哉」などと併用されることが多い。

豈^ニ A^{ンゼ} (哉)。

▼豈^ニに A^アせん (や)。

▽どうして A しようか。(いや、A しない。)

・「其」も「豈」と同様に用いられることがある。

さて、君たち、今日もよくがんばったね。

反語の形には、まだもうちよつと説明しなきゃならないものがあるんだが、それは次の時間にしよう。
お疲れさま。